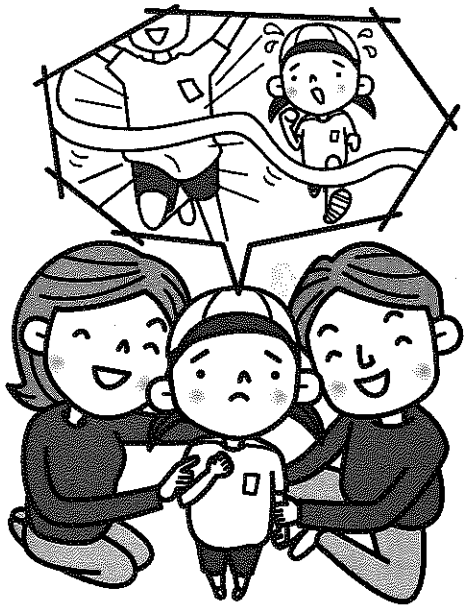


ますだ・しゅうじ ●1958年埼玉県生まれ。白梅学園大学子ども学部子ども学科教授。埼玉大学卒業後、県内の小学校で教諭として28年間勤務。子どもたちが綴る「ユーモア詩」で注目を浴びる。若手の教諭を集めて「教育実践研究会」を実施するなど、後進の指導にも励んでいる。著書に『ホンネ』が響き合う教室などがある。

親世代全体に先生への不信感がありますから、子どもが学校で注意を受けたりするとたちまちモンスターパーセント化するのはです。残念なことに、学校へのネガティブ感情は親子連鎖しています」

心のコップに入っているものは？

「また、今の子どもたちは多かれ少なかれ、『条件つき愛』の中にいます。親から『勉強のできる○○くんが好きよ』『足の速い○○ちゃんが好き』など、限定されて褒められている場合が多いのです。するとどうなるか。子どもは『成績の悪いボクはダメなんだ』『かけっこが遅くなったら、私、嫌われる』と、不安がつきまとうようになります」



中にはわが子に、「ダメな子ね」「そんなことでもできないの？」と、否定的な言葉を浴びせつづける親もいる。そうになると、子どもは「自分はダメだ」と思いこみ、本当に「ダメな子」になってしまうという。

「常にお友達と比較されるなど、ありのままの自分を認めてもらえない子は健全な自己肯定感が育たず、自信が持てなくなりやす。すると少し注意されただけでキレたり、パニックを起こすなどの行動に

子どもには「ゆったり育つ権利」がある

子どものイライラは、大人社会を反映

昨年10月27日に公表された文部科学省の調査によると、小学生の暴力行為は過去最多で、特に低学年で増えていることが明らかになった。さらに、2015年度に小学校・高校で見つかったいじめの数も過去最多を記録。何と22万4540件にもなった。

東京のある小学校では、妊娠中の女性教員に注意された小学2年生の男児が、教員のお腹を蹴ろうとした。幸い、別の教員が止めに入ってから事なきをえたが、もし蹴られていたら……と、想像するだけでも

恐ろしい。長年にわたって小学校で教鞭を執り、現在、白梅学園大学教授である増田修治さんに、子どもは「荒れ」についてうかがった。

「最近では、感情を抑えられない、自分の要求やわがままを通して強く思う子が多くなりました。学校の先生に注意されただけで『敵だ』と思いこみ、言うことを聞きません。

なぜ先生を敵視するかというと、その親世代が学校に対していいイメージを持っていないから。今の親たちが学齢期の頃は校内暴力が盛んで、体罰を是とする教師もいました。不良たちは先生から手ひどく怒られ、一方で優秀な生徒や中間層たちは、先生にかまってもらったいい思い出がない。

増田先生から
教わった

子どもが健やかに育つ大切なポイント

- 話を聴いてもらう経験をした子が、ほかの人の言葉を聴くようになる
- もっとゆったりと、子育てを楽しむというスタンスを
- 子どもの「自己肯定感」をいかに高めるかを考える
- 自然のまま・ありのままの自分を出せるような関わりを
- 他者を知ることが、人に対するやさしさにつながる
- 「人間ってすごい」という思いを持たせる
- 「みんな『自己肯定感』を求めている存在」であることを意識する

●出典/増田修治著「子どもが育つ言葉かけ」

「子どもは常に、自分の気持ちに、自分の気持ちに親にわかってほしい、受け止めてほしいと願っています。例えば転んだ時には『何やっっているの!』と叱りとばすのではなく、『大丈夫?』『平気?』と子どもの心に寄り添った言葉かけをすることが大切です。また、『ミラーリング』も心がけてください。子どもが『今日

ね、○○ちゃんと遊んで楽しかったんだ』と言ってきたら、『楽しくてよかったね』と、同じような言葉を返してあげるので。子どもは、自分の気持ちを受け止めてもらって安心するだけでなく、楽しかった出来事が心の中で咀嚼され、それが心の『肥料』になるのです。この積み重ねが、子どもの心を豊かにします」

国連の2016年度版世界幸福度ランキングでは、デンマークが1位に輝いた。彼の国には「母親の一番大切な仕事は、子どもを笑わせることよ」という言葉がある。

「笑いのある家庭には、子どもを包みこむような慈愛に満ちたやさしさがあります。子育てに『正解』や『完全』はありません。子育てとは、子どものことで悩んだり苦しんだり、そして喜ぶことで、わが子への思いを深く確かなものにしていく作業です。子どもの健全な自己肯定感には『ありのままの自分でいい』『ありのままの自分が好かれているんだ』という自信がベースにあつて育ちます。ですから、親や周りの大人は、『プラスの面もマイナスの面も全部ひっくるめて、あなたのことが好き』というメッセージを伝え、笑いのある家庭をつくってください」

していないだろうか? 増田さんによると、子どもの心を育てるのは「感情言語」だという。

出てしまうのです」
子どもの荒れは小学生だけでではない。昨年10月、都内で有数の幼小中高一貫校の高校生が傷害事件を起こし、世間を驚かせた。なぜいい子がそんなことをするのだろう。

「進学校に通う子どもたちは、『高学歴バトン』に苦しんでいるケースが多いのです。家は高収入で両親ともに高学歴。親の期待に添うべく、自分も高収入を得られるコースを歩まねばならないと、毎日キツイ勉強に耐えています。

人間の心の中にはコップのようなものがあって、そこが自己肯定感や安心感で満ちていけばいいのですが、逆に不満やストレスが溜まり、それがあふれた時が危険です。「いい子」が突然、問題行動を起こすのは、このような背景があるのです」

心が伸びやかになる「ユーモア詩」

お嫁さん 寺園晃一郎(小学4年)

ほくは、やさしいお嫁さんをもらいます。
友達とお酒を飲みに行った時
こわいお嫁さんは
「今まで何やってたの。
早く風呂に入って寝なさい。」
と言うけど、
やさしいお嫁さんなら
「早く寝なさい。」
だけですむからです。
あと、給料が少なかったら
こわいお嫁さんは
「給料が少ないから、おこづかいへらす。」
と言うけど、
やさしいお嫁さんなら
「あら、少なかったのね。」
だけですむからです。
あと、うるさいお嫁さんと
文句を言うお嫁さんも欲しくありません。
うるさいのと文句を言う女は
お母さんだけで十分です。



●出典/増田修治著
「子どもをしあわせにする 笑う子育て実例集」

「笑い」が健やかな子どもを育てる

「今の親、特に母親は、周囲から子育てを評価されますから大変です。『優秀な子』『優秀な母親』『問題行動を起こす子』『母親失格』と見なされるため、常に『いい親』でなくてはならない。ですから、子育てを楽しむ余裕などありません」

わが子を『きちんとした子』にしようと、「早く支度しなさい!」「宿題しなさい!」と命令ばかり